

環境問題への社会経済学的アプローチ再考

| | |
|-----|---|
| 著者 | 梅澤 直樹 |
| 雑誌名 | 大和大学研究紀要 |
| 巻 | 6 |
| ページ | 37-47 |
| 発行年 | 2020-03-16 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1677/00000188/ |



環境問題への社会経済学的アプローチ再考

Reconsideration of the Socio-Economic Approach to Environmental Issues

梅 澤 直 樹*

UMEZAWA Naoki

要 旨

環境問題は必ず社会的・経済的構造要因を内包しており、そうした構造的問題に鋭利な関心を抱く社会経済学的アプローチに基づく考察によって補完されないと十分には解明されえない。かつ、日本では宮本憲一氏の間申システム論やK.ポランニー、I. イリイチにまで視線を伸ばした玉野井芳郎氏の生命系の経済学など、そうした社会経済学的アプローチに基づくユニークで優れた環境問題研究が蓄積されてきたし、鳥越皓之、嘉田由紀子氏らの生活環境主義からの興味深いアプローチも見出される。だが、それらの業績にも課題は残されている。

そこで、本稿ではまず、社会的・経済的構造として焦点化されるべきものは何かを再確認すべく、二風谷ダム問題、水俣病、原子力発電所の立地問題という3つの事例を顧み、格差問題・抑圧移譲に加えて、人間と自然とを主体・客体として峻別しつつ「豊かさ」を追い求める「近代という時代」の特質を析出した。そのうえで、そうした視点から宮本氏らの業績を検証するとともに、筆者がかねて試みてきたマルクスの価値・価格論の抜本的再解釈に即して、さらに第2波フェミニズムによる日本の家父長制研究にも示唆を得ながら、残された課題を乗り越えてゆく方途を探った。

Abstract

To analyze environmental issues, we should pay special attention to socio-economic structures. And in Japan such an approach to environmental issues has relatively rich tradition. But this tradition also has several difficulties to solve.

So I try to identify what kind of socio-economic structures are vital to analyze environmental issues by survey of three typical cases and find disparity or shift of oppression on the one hand. On the other hand I find that cosmology of modern society and life style of modern society should be reexamined. Then I survey several Japanese unique and excellent environmental studies from such a view point to grasp their weak points. I also try to find the way how to break these impasses by refer to Japanese gender studies.

キーワード：社会的・経済的構造、抑圧移譲、自然観、「豊かな」社会、メタ・システムとしての資本主義

keywords: social-economic structures, shift of oppression, cosmology, "affluent" society, capitalism as a meta-system

I はじめに

環境経済学（Environmental Economics）の本格的な展開は1970年頃からであって、17世紀における重商主義をもってする経済学の萌芽的誕生や18世紀後半のA. スミスによるその体系的確立はおろか、現代経済学の嚆矢となった19世紀後半のL. ワルラスらによる限界革命以来の歴史と比較してもなお日は浅い。だが、いまや経済学の確固とした固有の領域をなすまでに成長してきている¹。理論的にも、たとえばその基礎的論点をなす環境の価値評価手法におけるように長足の進歩を遂げてきた。とはいえ、Economicsの応用として方法論的个人主義²に依拠している以上、そのアプローチには限界ものぞく。環境問題は社会的・経済的構造と不可分のものだからである。こうして、環境問題に対する経済学的考察は、社会的・経済的構造に鋭い眼差しを注ぐ社会経済学³

からのアプローチによって補完されなければならない。しかも、日本においては、まさに社会的・経済的構造に焦点を当てて経済事象を考察しようとするマルクス派経済学が大きな広がりを見せただけに、宮本憲一氏や玉野井芳郎氏に代表されるように、社会経済学に立脚した環境問題の考察に優れた先駆的業績を見出すことができる。しかしながら、その宮本、玉野井の両氏のいずれもがマルクス派経済学から出発しながら離脱して独自の理論を模索していったことが示すように、この方面からのアプローチにも少なからず課題は残されている。

そこで本稿では、まず、以下の3つの事例に即して、方法論的个人主義に立脚する環境問題へのアプローチがいかなる点に限界を宿しているのかを先行研究に学びつつ再確認する。すなわち、方法論的个人主義に基づく環境の価値評価手法の限界を現示した二風谷ダム問題、環

*大和大学政治経済学部

令和元年12月11日受理

境問題研究の原点としていまなお多くのことを教えてくれる水俣病、さらにそれらの考察から浮上した論点の統合性に眼を向けさせる原子力発電所の立地問題という3つの事例である。この作業は、方法論的個人主義に立脚する環境問題へのアプローチが抱える限界の照射を通じて、社会経済学的アプローチがどのような社会的・経済的構造問題を焦点化すべきなのかを再認識させてくれる。それを踏まえて、Ⅲ節では、宮本氏らの先駆的業績を検証し、またその先駆を成すI. イリイチやK. ポランニーの問題提起、あるいは社会学者鳥越皓之氏や嘉田由紀子氏らの生活環境主義にも触れながら、さらに第2派フェミニズムによる日本の家父長制の刺激的解析をも視野に、環境問題への社会経済学的アプローチにおけるK. マルクスの経済学のポテンシャルを再検討してみたい。

Ⅱ 社会経済学的アプローチが焦点化すべきもの

1 方法論的個人主義に拠る価値評価手法の限界

二風谷ダムは北海道の日高地方、アイヌの人々が独自の文化を育んできた地域に建設されたダムである。このダムは、当初、苫小牧東部地域に計画された大規模工業基地に工業用水を供給することを主目的としていたが、石油ショックによってこの計画が挫折した後は治水に重点目的を変更するなどしてなお建設が進められた。この経緯も「動き出したらとまらない」日本の公共工事の問題点を如実に体現しているという点で社会経済学的なアプローチにとって興味深い（平田 1997：23-28, 43-45, 49-51など参照）。背景に存在した大都市圏と地方との大きな経済格差という問題は、方法論的個人主義に立脚して費用便益分析を行うことの限界を明確に照らし出しており、以下ではこの点に注目したい。

すなわち、同ダム地元の平取町では、当初、ダム建設に反対する声が多かった。だが、気象・水文観測、地質調査などさまざまな政府調査が続けられて地元で国費が投下されていくなかで姿勢が変化した（同上：34-37, 38-43をも参照）。ダム建設によって失われるものと得られるものとの相対評価が逆転したということだが、平田剛士氏も指摘しているように、これはこの地域に投下された国費がもたらす地元経済振興効果が実感されたがゆえのことであって、事業機会や雇用機会がもともと豊富な大都市圏であれば生じ難かった現象であろう。このように、あるプロジェクトに対する費用・便益の評価は評価者がどのような社会的・経済的状況の下に置かれているかに依存するところがあり、そうした社会的・経済的状況がどのようにして生まれているかについての考察を抜きにして、当該プロジェクトに対する費用や便益の評価を十全に理解したことにはならない。

第2に、二風谷ダム建設に際しては、アイヌ民族の文化に与える底知れない打撃という観点から最後まで土地

買収を拒み、強制収容に抵抗して訴訟を起こした2人の人がいた。萱野茂氏と貝澤耕一氏である。2人にとってこのダム建設は、アイヌが生活を営む際の空間領域の単位としての「イオル」を、すなわち家屋や共同生産の場や墓地などのみならず神話的な伝承を持つ山や川をも内包した大切な生活空間を、まるごと押しつぶすプロジェクトにほかならなかった。くわえて、チプサンケ（新造した丸木舟の船降ろしの伝統儀式）の会場も水没させられた。20数年前に四半世紀の空白期間を経て萱野氏らによってようやく復活され、その後積み重ねられてきて二風谷の夏の一大イベントにまで成長し、儀式を通じてアイヌ文化を伝承することが期待されていた場が奪われたのである（同上：30-31）。

後者について少し敷衍すると、多文化共生が求められる20世紀末ともなると、さすがに単に土地を収用するというのではなく、下流に代替地も一応用意された。だが、萱野氏らにとっては、アイヌの人々にとって「聖地」であった場所をそのように簡単に移せるものではなく、そうした対応の仕方はむしろアイヌ文化に対する無理解の現れでしかないということになる（同上：32）。

こうして、萱野氏は裁判での最終陳述書をアイヌ語で読み上げた。アイヌ語では被告をはじめ誰もが理解できないであろうと予期したうえでのことである（同上：54-57, 13-14をも参照）。最終陳述としてはきわめて奇異な行為とも解されようが、相手の文化を真に尊重しようと思うならそれを理解するために相手の言葉を多少とも学ぼうとしたはずではないか、あなたがたにチンプンカンプンであるとすれば、そのこと自体があなたがたは本気でアイヌ文化を尊重していない証左にほかならないと、萱野氏の行為を奇異に受け取る側の怠慢、それを当然に思っている感性を痛烈に指弾したのである。

こうした第2の論点は、環境の価値評価をめぐるどのような問題を投げかけているであろうか。環境経済学において環境の価値評価手法としてもっとも汎用性が高く、広範に用いられるのは仮想評価法（Contingent Valuation Method）である。地域住民など関係者にアンケートを通じて当該環境の価値をもし貨幣評価するとすればと問うわけであるが、現地について事前調査を行うのみでなく、母集団における性、年齢、学歴、職業等の属性分布に配慮しつつ参加者を求めて少人数で自由討議するフォーカスグループ・セッションを複数回設け、関係者がその環境にどのような種類の関心を抱いているか、関心の強度はどうかといったことをチェックして調査票を作成してゆく。さらに、そうして作成された調査票を用いて小規模なプレテストを実施し調査票の妥当性を検証したうえで、本調査を実施し、その結果を統計的に処理するという手順を踏む（鷲田 1999：109以下⁴⁾）。したがって、いきなり街頭でのインタビューや郵

送、電話、インターネットなどによるアンケートで環境の貨幣評価が問われるわけではない。フォーカスグループ・セッションを通じて浮かび上がってきたさまざまな立場からの意見が調査票に反映され、アンケート回答者は異なる意見を知ったうえで自らの評価を決定することとなる。方法論的個人主義とはいえ、他者の立場に自らを置いてみてそこからはどのような風景が見えているかと想像力をめぐらせて自らの見方を吟味し、修正してゆくという、いわば「社会化する個人」を前提した方法論的個人主義、決してホブズ的な素朴で原子論的な類型ではないそれを想定しているともみなせよう⁵。

だが、萱野氏の痛烈な指弾を真摯に受けとめたとき、調査票において異なる意見を知るのみで果たしてどこまで人々は他者の立場に立ったときに見えてくる風景に想いを馳せることができるのか疑問を禁じえない。たしかに、20世紀末には「市民社会の討議に裏づけられない限り、デモクラシーの安定と発展はない」と解する「討議デモクラシー」論が展開されるようになった。そして、小人数での討論を重ねるのみでなく、長時間にわたるテレビ放映を通じて討議を広く国民規模に拡大するといった試みもイギリスやアメリカ合衆国などで試みられている。かつ、こうした討議デモクラシーの場を通じて意見を変える人々も少なくないという。とはいえ、そうした動向を積極的に評価、紹介している篠原一氏自身が認めているように、討議を重ねることによって人々の「状況的意見」はより理性的な方向へと変化するが、「基底的意見」は変わらなかった。また、討議参加者が日常生活に戻ってそれなりの時間が経過すると、討議直後に見られた変化もある程度揺れ戻す(篠原 2004: 156-165)。

しかも、こうした状況は、「三日間の討議によっては」という要因では尽くされないものへの関心を誘う。もちろん、篠原氏のうへの言葉も三日間では論じ尽くせないものがあるという意味でのものであるだろうが、問題はその論じ尽くせないものが何かである。換言すれば、関係者の意見の相違の背景に何があるのか、それは関係者たちがそれぞれに置かれている社会的・経済的状況とどの程度、どのように関わっているのかであり、さらに言えば、そもそもそうした背景の問題が関係者の討議でどこまで相互理解され、「社会化する個人」が実現されるのかという問題が問われてよいということである。

じっさい、J. フォスターが編集した *Valuing Nature?* において、自然の価値を貨幣で評価しようとするのは範疇の取り違えを犯しているとする M. サゴフ説をめぐって展開された諸論説のなかで M. ピーコックが主張していたように、同じ言葉が論者たちの価値観によって異なる意味を帯びたり、異なる文脈に置かれることもある。換言すれば、円滑に対話が進むとすれば前提となっている価値観がある程度共有されているからこそこのことという

わけである⁶。たしかに、価値観、したがって対象に切り込む視角ないし立脚点を異にする場合、取り上げたい論点やそれに付与する重みあるいはその置かれる文脈がずれて論議がすれちがい、戸惑いやもどかしさを覚えた経験を持つ人も少なくないであろう。もっとも、そうした場合でも、相互が真摯に対話を望んでいるのであれば、相手がなぜそのような視角から切り込もうとしているのか、その基底にある価値観はどのようなものなのかに眼を向けることはできるかもしれない。ひとまず自らの価値観を封印していわば相手の土俵でその主張に耳を傾けようとするわけである。だが、やはりピーコックが注意を促しているように、社会的規範や価値観は当事者が自由に選べるものではなく、むしろ社会的に与えられているところがある。本稿の問題関心に即せば、人びとの価値観や信念は彼らが置かれている社会的・経済的環境に制約されているところがあって、「社会化する個人」論のように想像上で立場を交換するといっても相手の抱く価値観や信念をその背景にまで遡ってどこまで理解できるのか心許ないところがあるというわけである。かつ、そうした理解を深めないままにひとまず自らの価値観を封印するのみでは、相手の主張に真に耳を傾けることもできないであろう⁷。かくして、「多数決で行われる民主主義は、少数者にとっては暴力」という萱野氏の告発もむべなるかなということになってしまう(平田: 58)。

2 水俣病が教えるもの

水俣病に早期から医師として取り組んだのみならず、積極的に支援活動に参加し、また私たちに啓発する多数の著作を公刊してきた原田正純氏は、「水俣病を学ぶと、水俣を映して政治なり、社会なり、己の学問なり、生きざまなりが見えてくる。水俣病はたんなる一地方の風土病的な地方病にとどまらず、そこには普遍的な諸問題や諸法則が含まれている」と指摘するとともに、氏にとって水俣病を通じて見えてきた世界は、なにより「人間の社会のなかに巣くっている抜き差しならぬ亀裂、差別の構造であった」と述懐していた。さらに、そうした差別の構造は国内、国外での開発をめぐる紛争や公害事件、あるいは職業病や労災などにも通底する根源的問題であり、「それこそが、地球的規模で環境を破壊し、人間を傷つけ、胎児を殺戮しつづけている」とも総括していた(原田 1989: 3-4)。こうして、氏は、水俣病のみならず、三池、土呂久、金武湾など九州・沖縄の公害・労災問題からカナダの先住民の水銀汚染被害、さらに中南米における環境問題にまで広範に鋭い視線を注いだ⁸。

以下では、こうした原田氏の問題意識を「抑圧移譲」というかたちでさらに深く追及した石田雄氏に学びつつ、環境問題に通底する差別問題に迫ってみたい。石田氏は、色川大吉氏らとの共同研究に参加し、チッソ⁹の

城下町としての水俣において患者が受けた地域社会からの差別¹⁰、あるいは植民地から持ち帰った人権軽視のチッソの経営体質などにも鋭い分析を加えているが、本稿ではとくに氏が次の事件に加えた考察に注目する。

すなわち、石田氏は、水俣高校定時制に通う生徒の書いた作文をめぐる事件に注目した。ある生徒が校内弁論大会で高い評価を受けて水俣高校定時制代表として熊本県の定時制高校文化大会に出場したところ、県はその発表内容に患者に対する差別を認めて「文化大会集録」に収載しなかった。それに反発した水俣高校があらためて卒業記念誌の冒頭に掲載し、定時制生徒の全家庭に配布したので、患者生徒が問題にしたという事件である。この事件を紹介しつつ、石田氏はある若い患者のこの事件に対する省察に焦点を当てた。

その若い患者は、補償金目当てに進んで水俣病になろうとした者もいるという、患者の苦悩にまったく無理解な差別発言に心底憤りつつ、そうした発言が生まれる背景に冷静に眼を向け、「定時制というそれ自身差別されているが故に逆にひどくなる差別感」を掘り起こした。定時制の生徒からすれば、昼間働いて夜間に学ぶだけでも大きな負担なのに、職場では他の人々より早く退勤することで白眼視され、学校では遅刻を責められる。しかも、仕事は低賃金できつい。「自分より下に踏みつける連中でも見つけないと、とてもじゃねえけどやってゆけん」。にもかかわらず、その踏み台だった患者の家族で同世代の若者が補償金で憧れの高価なバイクなどを乗り回しているのを目にすると、パニックを起こすこととなる。つまり、今度の事件は、定時制が「せっぱつまってる」ことの証にほかならない、と。

のみならず、この若い患者は、後日の頑な教頭とのやりとりを経て、差別に鈍感な人々の考え方を次のように読み解いた。水俣病患者ばかりでなく民衆なら誰でも苦しい。それが世間だ。しかし、みんなじっと耐えている。それなのに、わがままに騒ぎ立てて高額な補償金をふんだくる患者たちは許せないと彼らは考えているのだ、と。くわえて、「彼等が下積みのさ、底辺であればある程」許せない気持ちが高じる。したがって、「行きつくところは必ず弱いもんだろしのがみ合い、つぶし合い」にならざるをえない、と。

こうして、この若い患者は、ほんとうの問題が「民衆の内部」にあること、「貧しいものが追い詰められた時、何故いつも手を握り合わねえのか、何故助け合えねえのか」という点にあることを抉り出す。のみならず、自分たちの傷がいまなおうずくのも、権力によって手ひどい扱いを受けたからではなく、「部落の、最も親しかった人達によって切られた傷だから」であることにあらためて想到したのであった。

こうした若い患者の省察に、石田氏はかつて師の丸山

眞男氏が「抑圧移譲」と名づけた事象の鮮やかな対象化を見出した。水俣病は、単に弱い者へのしわ寄せというばかりではなく、弱い者どうしでのいがみ合い、つぶし合いを内包している。しかも、それは、上述の差別に鈍感な人々の考え方の鋭い解読にあったように、人々のあいだに格差や抑圧が存在するところではいずこにも生み出されがちな問題である。じっさい、水俣でも、抑圧移譲は、チッソの企業城下町、あるいは古くからの居住者と天草などからの流入者との軋轢といった特殊的要因を超えて、チッソの社員と工員、臨時工や下請け労働者といった諸所に偏在する要因をも連鎖の一環とする重畳構造のうちで現れ出ている、と（石田 1995：63-67）。

のみならず、石田氏は、水俣における抑圧と差別の連鎖を、「逐次抑圧をより下のものに移譲し、末端が最大の圧力を受ける」という「ドミノ現象」と見立てたうえで、水俣のそれが「日本の縮図」であるとすれば、「すべての日本人が抑圧の連鎖のどこかに位置している筈」であることを思い起こさせる。と同時に、「そのドミノは日本の国境をこえて第三世界まで及んでいる」ことを指摘する。そのうえで、この抑圧のドミノに無感覚なのは、満員電車で自らが隣の人に体重を預けることで自覚しないままに自らが受けている圧力を委譲しているようなものであること、だからこそ「最後に電車の隅でつぶされようとする人」に想像力を働かせて、その人にかかる圧力を軽減することが私たちにとって緊要な課題であることを訴えたのである（同上：85-86）。

第2に、水俣病は環境問題への社会経済学的アプローチにとって逸しえないもう一つの論点をも教えてくれる。すなわち、マルクス派が「社会的・経済的構造」と言うとき、念頭に置かれているのは資本主義的市場経済システムや社会主義的経済システムという「体制」、あるいはその下でのサブ・システムの諸制度でありがちである。だが、資本主義的市場経済システムにせよ社会主義的経済システムにせよ、いずれもが「豊かさ」¹¹を追いかけてきたという「近代社会」の特性、さらにその「豊かさ」の追及を担ってきた「近代的」科学・技術が内包する「近代的」自然観、ないし主体としての人間と客体としての自然とを截然と分離する「近代的な」人間と自然との関係の捉え方、総じて資本主義か社会主義かといった体制的特性を超えた、「近代という時代」の社会的・経済的構造としての特性をも問うべきではないのかということの水俣病は教えてくれているのである。

まず、石牟礼道子氏に拠りつつ「民衆の自然」のあり方を開示しようとした高木仁三郎氏の所説に注目してみよう。高木氏は、石牟礼氏の『苦海浄土』第三章「ゆき女きき書き」及び第四章「天の魚」からそれぞれ印象的な叙述を取り上げ、そこに展開されている人間と自然との関係に「近代を超える精神」を読み取っている（高木

1985：196以下)。いずれも夫婦で漁をしていた頃の回顧であるが、前者では、漁場で「ほーい、ほい、きょうもまた来たぞい」と魚に声をかけて漁を始めたり、「おまやもうち家の舟にあがってからはうち家の者じゃけん、ちゃあんと入っとなれちゅうと、よそむくような目つきして、すねてあまえるとじゃけん」と、捕獲したタコと愛しくつきあってきた日々を懐かしく振り返る女性が描かれている。ここには、「駄々をこねて」壺からなかなか出てこなかったり、出てきたかと思うと舟の上を逃げ回るタコの様子が、「その逃げ足の速さ、速さ。ようも八本足のもつれもせずに良う交わして、つうつう走りよる。こっちも舟がひっくり返るくらいに追っかけて」とユーモラスに描かれている。それに対して後者では、大漁を「よんべはえらいエベスさまの、われわれが舟についとらしたわい」と感謝するのみならず、夜通しの大働きに疲れて早く帰りたいときに風で風が止まって舟を走らせられなくなってもなんら苛つくことなく、むしろ、釣ったなかでいちばん気に入った鯛と沖のうつくしか潮で炊いた米の飯と焼酎を夫婦で楽しんだ後に、ひと眠りして風を待つ漁師の姿が描かれている。しかも、その漁師はその間にも、「空は唐天竺までもに拡がっとなげな」と空の広さに感慨を覚え、潮に流される舟にも「唐じゃろと天竺じゃろと流れてゆけばよい」と悠然とかまえている。ここには、「すべての進行が陰に陽に不知火海」の存在を基底にし、そのうえに漂うように行われてゆく」と高木氏が指摘している『苦海浄土』の世界の特性を、ひととき明瞭に読み取れよう。さらに、いずれの逸話においても、「魚はとれすぎるということもなく、節度ある漁の日々が過ぎた」、あるいは「天のくれらすもんを、ただで、わが要ると思うしことって、その日を暮らす。これより上の栄華のどこにゆけばあろうかい」と、しゃにむに量的拡大を追う近代社会・経済の行き方とは異質なライフスタイルが表現されているのも印象深い（高木同上：197-201。石牟礼 1972：129-132, 185-189）。

こうした逸話を通して、高木氏は、まず、上述のような『苦海浄土』の世界を貫くリズムに顕現する「生命の流れ」、さらに言えばそうした「根源的自然」ないし「生命の確かな存在感」がわれわれの魂に及ぼす作用に触れつつ、「民衆的な地平からいま自然をみる、ということの意味」ないし「民衆の生と生活にとって、自然とはいかなるものでありうるのか」を、汲み取ろうとしている。そしてさらに、そこから汲み取りうるものをより確かなものとするべく、上述のような世界が「私たちをほっとさせ、やすらぎを与えてくれる」所以を追及する。その結果、それが「何よりもそこに展開されている、海・人・魚・舟のやりとりの妙」に由来することを見出す。曰く、「自然と人間の交感が根源的なレベルに達するとき、そこにはおかしみさえ生まれるような、やさしい関係が成

立」する。あるいは、漁師にとって「生きるための生業」であるものが、同時に「強く遊びの要素」を伴っており、しかもそのことによって「自然と人間との一方通行でない関係が成立し、驚くほど自由で柔軟な境地が実現」している、と。こうした契機が見出されるからこそ、かの逸話は「近代以前へと立ち戻ることに終わるのではなく、近代を串刺しにして突き破る力」を持つと高木氏は解していたのである（高木同上：201, 203-204）。

他方で、若い頃には未認定患者として細川護熙熊本県知事（当時）に過激に詰め寄るほど激しく闘いもした緒方正人氏は、自らの半生を振り返りながら、水俣病闘争が裁判や認定申請という「制度の中での手続き的な運動」に陥ってしまったことに感じたもどかしさを突き詰めてゆく。そして、たとえば交通事故には自動車保険というように、「世の中は、問題が起きるとそれを処理する仕組みを作ることだけには懸命」で、そのあげくあらゆるものが「医療制度の問題やお金を払えばいいんでしょ」ということになって責任というものが「制度化」されてしまい、「人間の責任という一番大事なものが抜け落ちて」いつていること、換言すれば「率直に事実を認め、心から詫げる」といったことが忘れ去られ、「魂のゆくえがないがしろにされている時代」であることを告発するに至る（緒方 2001：40-41, 54-58。さらに、8-9, 63, 150-154などを参照）¹²。しかも、この告発は、じつは、水俣病に係る「社会的・経済的構造」の性格を追求し、「システムの責任」を明らかにしてゆこうとするときに陥りがちな不徹底さへの警鐘ともなっている。

すなわち、「心からのお詫び」を求めているのにそれが「システムの責任」といういわばブラックボックスに飲み込まれるだけという状態に苛立った緒方氏は、やがて「お前はどうかんだ」と自問することとなる。そして、自身がチッソの幹部や労働者であったとしたらと立場を逆転してみたとき、「お金が支配している社会」の下で儲かって仕方ない状態の誘惑に抗したかと首を傾げ、少なくとも、企業城下町において内部告発などした場合に押し寄せてくる圧力を跳ね除けた自信はないことに気づく。つまり、チッソの労働者、ひいては幹部と同じことをしてしまったのではないかと気づき、うろたえ、まさに狂うほどに苦悩する。そのさい、うえの自問は、チッソが生産しているようなさまざまな化学製品に囲まれて「豊かな」生活を享受している自らのライフスタイルの再審へと深まってゆく。「“豊かさ”に駆り立てられた時代」という「時代の価値観が構造的に組み込まれている」世の中に自らも取り込まれていたのではないか、その意味で、「時代の中ではすでに私たちも『もうひとりのチッソ』だったのではないか」と（同上：42-49など）。緒方氏が渴望した「心からのお詫び」は、「自らの」事件との関わりを立場を変えて反省し、時代の中で

「自らがなにものであるか」を明確に自覚することを求めせしめたのである。

緒方氏の場合、この近代的ライフスタイルの再審は、さらに、魚介や小動物など「命あるものをもってきて食うとったわりには、まだ詫びをいれとらんかった」という、自然とのつきあい方への反省へと向かう(同上：48。さらに、64-71, 93-100, 178-180などをも参照)。これは、自然をひたすら客体視する近代のコスモロジーの問い直しにはかならない。緒方氏による近代的消費生活の側からのアプローチは、既述したような高木氏による労働の側からのアプローチと相呼応しながら、「近代」という時代を人間と自然との関係のあり方という根源的なところで問い直す地点へと、展開していったと解してよいであろう。

このように、水俣病に関わる「社会的・経済的構造的性」を問うことは、私たちのライフスタイルを問い直すことを求める。換言すれば、資本主義とか社会主義とかといった体制論的次元を超えて、近代的な「豊かな」社会とはどのような社会なのか、そこに暮らす自らはどのような存在なのかという地平までひとたび降りて問い直さないかぎり、水俣病の「社会的・経済的構造的性」を真に理解し、告発することなど不可能ではないか、告発しようとしている水俣病が担う社会的・経済的構造的性と私たちも一体の存在であることを忘れた表面的な告発に留まってしまうのではないかと、緒方氏は教えてくれていた。

のみならず、緒方氏は、「本当の自分」を問うことのなかから、「戦争の問題を考えるようになり、沖縄や広島・長崎の問題も少しわかるようになり」と、水俣病と戦争や広島・長崎の問題が「どうも別の問題じゃない」と気づいたり、「日本国内だけじゃなくて、あちこちで起きる民族同士の対立の問題や宗教戦争」などについても考えるようになったと述懐していた(同上：131)。制度に埋もれることなく一人の人間に立ち返り、立場を変えてみれば自らは時代の構造的な性格に取込まれた一員だと自覚することは、その眼差しが水俣を超えて日本国内の諸所に、さらに国境を越えてグローバルに注がれるようになっていったとき、たとえば安価に便利なものを享受している自らのライフスタイルとそうした地域の戦争や紛争はどのようにつながっているのかといった問題の探求へと展開してゆくということであろう。つまり、「近代的社会システム」において「自らがなにものであるか」を問い直すことは、石田氏の言う抑圧ドミノのなかでの自らの位置を問うことにも通じているのである。

3 原子力発電所の立地問題

大都会に電力を供給する原子力発電所が消費地から遠く離れた僻地に建設されていることは、福島のみならず新潟、福井などに見られるように通例のことである。大

都会の繁栄から取り残された僻地の状況を利用したこのような立地は、二風谷ダム問題にも見られたように、環境問題にしばしば見出される構図でもある。だが、これを受益圏対受苦圏といった単純な二項対立図式で捉えることは誤っていると開沼博氏は主張する。立地を受け入れた側も一方的に押し付けられたわけではなく、むしろ貧困から脱出するチャンスを求めて主体的に誘致した面もあるというわけである(開沼 2011：322-325。38-41, 77-78, 194, 352などをも参照)。こうして、原子力発電所の立地問題は、受け入れた側の「豊かな」社会を求める欲望という要因、すなわち水俣病に関わって緒方氏が挙げた「近代的な」ライフスタイルという要因と結びつく。しかも、こうした欲望がかき立てられることは前近代の僻地にはなかったという意味でも、この要因は「近代的」であることを開沼氏は指摘する。のみならず、原子力発電所を受け入れた地域が、一定の「豊かさ」を手に入れたとしても、結局、経済的苦境からの脱出を果たせず、ますます原子力発電所に依存していくこととなっているという状況を、ポストコロニアルスタディーズに学びつつ追及する。地方の服従は、「まさにこの自国内に後進性・周縁性をもった<他者>を見つけ出し近代的な<自己>が征服していく極めてコロニアルなプロセスとも捉えることができる」と(同上：38-41。69, 320, 322-325, 355-357などをも参照)。この認識を、I. ウォーラステインの世界システム論に倣い、一見他者に見えるものをも自らの必須の構成要素として内包する「全体的なシステム」としての「近代」の問題として捉え返すならば、原子力発電所の立地問題は、中心＝周縁構造をたえず再生産しながら存続するシステムという意味でも「近代的」というわけである¹³。

すなわち、まず、「豊かな」社会を求める欲望が中心＝周縁という構図においてかき立てられることの「近代性」について、開沼氏は次のように指摘する。前近代の僻地は、「自らの消費物の供給不足を満たそうと必死に農漁業に勤しんでいた貧しいムラ」¹⁴、すなわち国家あるいは中央が主導する市場に対して『閉じたムラ』ないし農林漁業を中心に「独立して存在してきたムラ」(同上：180, 188)だったのであり、その関心の中心は「自らの維持」、つまり「どれだけ作物が豊作か、漁獲物が大漁かという生産、あるいは子孫がムラで落ち着いて暮らしてゆけるかという再生産」であった(同上：248)。要するに、前近代においては僻地といえども「自立性を確保しつつ営まれてきた」のであり、「おれたちがいるところ」こそが「中央」だったのである(同上：245)。

しかし、そうした僻地も、近代化に伴う「中央の資本の進出」によって、自給自足の生産物だったものが「国内市場のなかで交換価値を持つ商品として認識され」るようになるというように、「国家と市場に『開かれたム

ラ』へと変貌』していくこととなった(同上：179-180)。

さらに、経済成長期ともなると、周縁地は「国家という鏡」を見て「自らの容姿を確かめながら、自らの後進性や周縁性を自覚し、そこから逃れ中心に近づこうという作動を見せるようになる」(同上：248-249)。かつ、そうした性向をテレビや新聞という「近代的な」マス・メディアが精力的に牽引した。「成長の初期において巨大地域開発政策の誘致キャンペーンで描かれた『夢』は「地元新聞を通して多くの県民に共有され」ることとなったし、電気が通るようになるとテレビを通じて「日本の成長が実感されるようになった」。東京オリンピックや万国博、そしてそれに付随した新幹線、高速道路の開通や都市景観の変貌など日本が近代化してゆく様子を、テレビをはじめとするマス・メディアはありありと映し出し続け、「戦後日本を一つの共同体にまとめあげていった」のである(同上：318-319)。

他方で、経済成長とともに、農業を営むにも「高価な肥料や農耕機器」が必要となり、その借金を返済するために「出稼ぎ」に出たり、兼業したりということになっていった。福島第一原発の地元である大熊町について言えば、土は痩せ、潮風も受けるというように自然条件が農業に適さず、「福島のチベット」と呼ばれるような地域であって、秋になると出稼ぎが当たり前であり、出稼ぎで生計をたてる住民が半数という地区もあったという。そうした地域に原子力発電所が来ると、なにより雇用が生まれ、もはや出稼ぎに行かずに家族と一緒に暮らせることとなったのである(同上：241-245, 273-276)。

のみならず、原子力発電所は、わらぶき屋根から瓦屋根へに象徴される住環境の変貌に加えて、東電社員や下請け作業員を対象とする「ドライブインや喫茶店、スナック」などをも運んできた。また、「生活道路や下水道」の整備が急速に進み、「文化施設、スポーツ施設」なども建設された。ムラは「それまでなかった近代的な要素を持つようになり、住民は、その舞台で演じられる成長の夢のドラマのなかに身を置く」ようになった。こうして、「原発がくれば仙台みたいになれる」という住民の言葉が示したように、高度経済成長時代の日本全体を席捲した「都市化」への欲望が原子力発電所の誘致を後押ししていった(同上：274, 277-278, 318)。

ちなみに、原子力発電所の建設のために「中央」から派遣されてきた東電エリートや家族連れで赴任してきたGE社員との交流も、地元の人々にコーラ、クリスマスケーキ、ホームパーティへの招待などの「近代の先端」と接する機会をもたらし、「少なからぬ驚きと戸惑い」とともに、「それまでにはなかった喜び、すなわち、中央と自らの差の実感のなかにあるある種の欲望を生み出していった」という(同上：281-286)¹⁵。

しかしながら、原子力発電所の立地によってもたらされる財政収入はやがて低下してゆくのに対して、「経済水準が上がった状態に慣れてしまった」財政を切り詰めるのは容易でない。また、「自治体の規模に合わない収入が生まれたがゆえの無駄遣い」をも含んで建設されたハコモノの維持費は膨らんでゆく。しかも、消費者としての「欲望」はやはり日本全体の動向を映し出して「モノからコトへ」と対象を移しながら持続する。こうして、地元自治体は結局、財政的苦境から抜け出すことができず、プルサーマル計画の容認などを含めて原子力発電所への依存を強めてゆく(同上：130-141, 317-318, 323-324, 356-357)¹⁶。原子力発電所をめぐる中心＝周縁構造は再生産、固定化されてゆくというわけである。

III 先行研究を超えて

前節では、二風谷ダム問題に即して環境価値の評価は評価者がどのような社会的・経済的構造の下に暮らしているかに左右されるところがあって、その十全な理解には社会経済学的アプローチが不可欠であることをまず確認した。ついで、水俣病に係る先行研究から、社会的・経済的構造としての格差や差別を問おうとすれば、抑圧移譲への眼差しもまた欠かせないことを教えられた。さらに、社会的・経済的構造には「体制」論を超えて「近代という時代」の特性もまた含まれるべきであることを学んだ。一方で、生産者や消費者として自然とどう向き合うのかという点で近代社会には特有の自然観が存在するのではないか、その特性を前近代社会のそれと比較しつつ明確にすべきではないか、さらにそうした特性と環境問題との関連を問うべきではないかという論点である。二風谷ダム問題の後段で取り上げたイオルやチプサンケをめぐる原告と被告との懸隔も、この論点に関わるところがある。他方で、「豊かさ」を貪欲に追い求める近代社会のライフスタイルそのものが環境問題と深く関わっているのであって、この「近代的な」ライフスタイルの特質を究明しなければならないという論点も浮上した。最後に、原子力発電所の立地問題を通じては、近代社会のライフスタイル、すなわち「豊かな」社会を求める欲望こそが環境問題にしばしば見出される格差・差別的ないし中心＝周縁構造を再生産しているという、それまで考察してきた諸契機間の相互作用を見出すことができた。

そこで、本節では、こうした課題に社会経済学的アプローチの先行研究はどこまで迫っていたかを検討してみたい。といっても、社会経済学的アプローチの先行研究は多岐にわたる¹⁷。したがって、その本格的検討は別稿に譲り、ここでは先行研究の成果を確認するとともに、それらがなおどこに空隙を残しているかについて簡単に検討するにとどめる。そのうえで、先行研究が残した空

隙を埋めるためにマルクスの経済学がどこまで役立ちうるかに少し眼を向けてみたい。というのも、マルクスの経済学は社会経済学の代表的な先駆であるばかりでなく、オーソドックスなマルクス経済学には集約されきらないポテンシャルを掘り起こす余地がなおあると解されるからである。この作業は、日本における女性差別の前近代の特質、だからまた近代の特質の鋭利な解析を介して、近代的自然観の問い直し方の再考をも迫る。

まず、宮本氏が、環境衛生学者の庄司光氏と協働して、公害問題が人々の耳目を集めた高度経済成長末期よりはるか以前から、学際的に公害問題の研究を切り開いてきたパイオニアのひとりであることは広く知られている。宮本氏は、早期の労作『社会資本論』において、社会的一般労働手段や社会的共同消費手段の考察から始めて、それらが資本制社会の下で受ける特殊な規定性と国家によるそれらの経済的総括、さらに独占資本主義段階におけるその変貌というように、オーソドックスなマルクス経済学解釈に拠つつ丹念に理論的考察を重ねる一方で、資料にのみ頼るのではなく現場を訪ね、既存の情報やデータを自らの足と眼で検証した。四日市公害裁判では原告側証人に立つなど、積極的にコミットする実践的な研究者でもあった。そうした研究の積み重ねから生まれたのが、「環境経済学には既存の理論体系はない、環境の変化と環境問題という現実の素材と歴史の中から出発して理論をつくらなければならない」という認識であり、その成果が、都留重人氏の「素材と体制」という認識枠組みに「中間システム」という契機を加えた独自の環境経済学である（宮本 2007：72-73）。

この中間システムは、資本蓄積の構造や産業構造など9つの項目から成るが、「歴史貫通的であると同時に資本主義体制の限定をうける」ものであり、また「各国の生産力の発展段階や歴史的社会的性格によっても異なる」と規定されていて（同上：72）、体制論を超えて近代という時代の社会的・経済的構造をも追及しようとする本稿にとっても興味深い。

だが、格差・差別や抑圧移譲、さらに近代科学＝技術の基盤ともなっている近代の自然観あるいは近代的なライフスタイルとの関わりに注目して、中間システム論に立ち入ってみると、物足りなさも残る。たしかに、前者に関わっては、「公共的介入のあり方」という第7の項目があり、その下位項目として「基本的人権の態様」や「民主主義と自由のあり方」が挙げられている。さらに、「市民社会のあり方」という第8の項目も存在する。しかしながら、そもそも市場経済システムは、あるいは資本主義的経済システムは、こうした項目に対してどのような関係に立つのかといったことが十分に掘り下げられていない。その作業は「体制的規定を受ける政策」を批判的に検討する第3段階をまっとうという構想とも受け取

れるが（同上：72）、やはり中間システムの解析自身においてそれらを包む市場経済システムや資本主義的経済システムとの適合性が考察されて然るべきではなかろうか。

他方で、近代的なライフスタイルに関連しても、たしかに、中間システムのなかには「生活様式」という第5の項目がある。そして、そのなかで大量生産と都市化とが取り上げられており、大量生産に関しては、「現代社会では消費者は経済において主権をもっておらず、生産者のつくりだす共通の生活様式の随伴者となっている」ことに光があてられる。後述のイリイチの近代社会批判とも符合する指摘と言えよう。だが、この点に関して宮本氏が論及しているのは、「大量の広告・宣伝という情報サービスのマス・メディアの影響が大きい」こと、すなわち J.K. ガルブレイスの言う依存効果であって、豊かになった社会で消費者はどのように変容しているのか、消費者が大なり小なり「踊りたがっている」ところがあるから「踊らせられる」ことにもなっているのではないかといった、「豊かさ」を追い求めてきた「近代という時代」の質に関わる分析がない（同上：65-66）。ボードリヤールなどに学びながら¹⁸、環境問題のひとつの重要なカギを成している「欲望」の質にもメスを加えないと、現代の環境問題を真に理解し、克服の道を探ることはできないであろう。じっさい、近代経済史は、たとえば川北稔氏が示したように、技術革新やそれに規定された生産・社会構造の変革の側面からばかりでなく、需要が経済を引っ張っていく demand pull 型のモデルによっても興味深く考察されうるのである（川北 2010）。

こうした課題を残した宮本説に対して、玉野井氏は、宇野派的マルクス経済学から出発して、ポランニーやイリイチの個性的な市場経済批判へ、さらにエントロピー論へと視野を広げ、独自の生命系の経済学を構築していった。経済は人間と自然との物質代謝の営みであり、かつそれはより大きな生命系全体での物質代謝の一環としてはじめて成り立っている。にもかかわらず、既存の経済学は生命系全体の物質代謝が有する論理に眼を閉じて市場経済システム領域内の諸現象の解明のみに自らを局限してきたと、その狭隘さを批判したのである。

しかも、この既存の経済学に対する批判は、自然の生命系としての論理を捨象する営みである工業が基軸を成す近代社会に対する批判と結合していた。すなわち、玉野井氏は、E. ダビッドに依拠しつつ、農業においては人間は「生きた有機体」たる自然との協働者ないし生きた自然の自律的作用の補助者であって、自然の生命系の律動を根底に置いて活動するしかないのに対して、工業では自然は人間の手で限りなく置き換えられてゆく自然、「死んだ素材」として取り扱われるというように、農業と工業とを対置しつつ、近代社会批判を展開していた

(玉野井 1990a：第2章，第3章。とくに40-46など)。

玉野井氏の農業に対する評価には異論もあろう¹⁹。だが，上述のような近代社会批判は前節において水俣病に即して見た近代的自然観の再審とたしかに重なるところをもつ。しかも，この生命系における物質代謝，したがって循環を重視する姿勢は，地域内での物質循環や地域共同体の役割の重視につながっていた(玉野井 1990b)。つまり，玉野井説には「近代という時代」の社会的・経済的構造へのラディカルな批判が内蔵されていたというわけである。かつ，こうした玉野井説は，イリイチやポランニーによる近代社会批判から影響を受けていた。

そこでこれら両説をごく簡潔に顧みれば，まずポランニーは，近代史を振り返るなかで，自己調整的な市場システムは社会の人間の実在と自然的実在とを危機に陥れること，だからまた近代社会における前者の広がりはそのれに対する社会の側からの自己防衛運動を惹起することを別決していた。また，近代が創出した「複雑な社会」は一人の行為が他者に及ぼす帰結を不透明にし，重畳して思わざる悲劇を招来することもあることを直視し，だからこそ人々が連携してそうした不透明性を少しでも解消する「責任を担うことによる自由」を求めた(ポランニー 2012，及び若森 2011)。さらに，文化は定着ないし根ざすことと不可分であり，あまりに変化の速い現代資本主義社会に危機感を覚えてもいた(若森 2001)。

また，ポランニーに影響を受けたイリイチは，コンヴィヴィアリティやヴァナキュラーといった用語を駆使しつつ，近代的な医療や学校教育や交通手段あるいは家事労働を俎上にのせ，専門家が創出した道具や制度の下で，型にはめられた操作的活動ないしシャドウ・ワークが充溢する産業主義社会を批判し，人々が主体的に使いこなせて，彼らの生きる力に資し，彼らの成長を促すような道具を復権させ，かつそれらを用いる主体が連携する社会を構築することを求めた(イリイチ 1982，2015)。

いずれも「近代という時代」の特質の興味深い解析である。だが，玉野井氏の所説を含めて，市場経済システムや資本主義的経済システム自体の分析は抽象的で，脱近代化の現実的な道筋は見えづらい。

同様に，生活環境主義も興味深い洞察を含んでいる。たとえば，嘉田氏は，認識と行動との相互依存性を指摘するとともに，清浄と汚れとを二項対立的に捉えることは汚れから無縁になることを求めさせ，差別につながる，むしろ汚れとつきあひながら解決の糸口を探すべきと主張している。また，近代技術主義と自然環境主義のいずれにも偏らず，生活者の目線で環境問題に取り組もうとして，地域の風土とつきあひながら地域共同体が育んできた生活者としての知恵を再評価すべきとも提言している(嘉田 1995：第I部)。いずれも示唆的であり，ポランニーやイリイチ，あるいは辻信一氏らのスロー・ライフ

の再評価論を含むE.F.シューマッハーの系譜に連なる人々などとも響き合うところをもつ。だが，やはり生活環境主義を現実化させる現代的道筋は見えづらい。

そこで，マルクスの経済学が内包していたポテンシャルに立ち返ってみると，まず，市場経済システムは私的所有者たちによって構成されることに鋭く着目してマルクス説を再構築したのが宇野弘蔵氏の価値尺度論であり，同説は，本来，量的尺度論に留まらず，市場とは私的所有者たちが持ち込む物差しの質を整除してゆく場でもあるという認識へと展開していくはずのものである。しかも，その整除は当該市場で通用する物差しの質を唯一のものに統一するとはかぎらないことを明みに出す。私的所有者であれば，自らの物差しで測って有利なら相手の物差しの質にはこだわらないからである。つまり，合意による取引は必ずしも等価交換を意味せず，同一市場に質を異にするいくつかの物差しが並存するし，そこに差別・格差も温存される。たとえば，主婦のパートタイム労働に適用される物差しは差別されているというように。かつ，どのような質の物差しなら許容されるかは，ジェンダー意識といった当該市場を包摂する歴史的，文化的環境にも依存する(拙稿 2002：64-65)。こうして，市場経済システムは，たとえばローカル，ナショナル，グローバルというように，しかもそれぞれに複数の物差しを並存させた，諸市場システムの重層的構造物ないしパッチワーク的構造物であることがわかる。

同様に，資本主義的経済システムもまた格差・差別を温存する性格を持つ。というのは，価値から生産価格へのマルクスの転化論の挫折は，あらためて価値と生産価格との次元の相違というマルクスの基礎認識の意味を省みさせ，転化論の挫折自体が，資本主義的経済システムの価格世界は自己完結的なメタ・システムであって，自らの下に差別や格差を内包したサブ・システムを包摂しうる懐の深さを備えていることに想到させるからである(拙著 1991：第1-4章，補論)。たとえば，主婦を低賃金のパートタイム労働者として雇用せしめるようなジェンダー意識の世界をそのままに包摂することができるというわけである。

こうして，資本主義的市場経済システムを普及させた「近代」は，人々の基本的人権の開花を本性的に推し進めるとはかぎらず，むしろ近代に固有のかたちで差別を温存するメカニズムを再生産してゆく。だが，同時に，資本主義的経済システムの懐の深さは，それがサブ・システムの変化を受け入れて自らを変貌させるゆとり，一定の柔軟性を備えたシステムであることををも意味する。市場経済システムが異なる質の尺度を備えた複数の市場から成ることと連関して，資本主義的市場経済システムは，たとえばアングロサクソンの，北歐的，日本的等々と多様に展開している所以である。だからまた，資本主

義的市場経済システムを改革したければ、この経済システムのこうした特性を踏まえ、いま、ここでは、どのサブ・システムに、あるいは重層構造ないしパッチワーク構造のなかのどの市場のどの物差しに働きかけるべきかを見極めるところにひとつのカギがあることもわかる。

最後に、資本主義的市場経済システムの懐の深さ、多様性は、近代的自然観の問い直しにも懐の深さを求めることに触れておこう²⁰。すなわち、浅井美智子氏は、日本の女性差別のあり方を理解するには、「母性幻想」とその帰結としての「無責任性」を逸せないことを鋭く描き出していた。さらに、大越愛子氏は、その無責任性が自然破壊に通底しているありさまをも厳しく告発していた。日本の環境問題に体现される病理を捉えるには、西欧基準の「近代的自然観」論に無謀介に依拠するのではなく、サブ・システムとしての日本の自然観を解明することが不可欠というわけである（拙稿 1997：106-108）。

注

- 1 周知のように W.S. ジェボンズは石炭利用のエネルギー収支計算を試みていたし、A.C. ピグーも都市部での工場建設に伴うアメニティの破壊や蒸気機関車の火花による森林火災などに論及している。だが、ピグーは、「環境」を「周辺状況 (surroundings)」という広い意味で捉え、上記の事例も「経済的厚生を最大化を損ない、資源配分上の歪みを結果する多種多様な事例」のひとつとして取り扱っていたというように（大森 2004：344-345, 349-349）、未だ萌芽的な取り組みであったと言える。ちなみに、現在では、日本でも環境経済・政策学会の会員は1000名を超えるにいたっている。
- 2 但し、方法論的個人主義にも多様な類型区分がなされうることについては、松嶋（2019：24-26）を参照。
- 3 Economics との対比では、経済学の原点としての Political Economy が想起され、その訳語として政治経済学が充てられることも多いが、本稿では近隣科学に開かれた経済学であることを重視し、社会経済学を用いる。
- 4 鷲田説は方法論的個人主義に立脚しつつ、諸個人の選好が時代や社会によって異なることにも注意を向け、自然の価値評価についても「特定の時代の特定の人々の感性と知識、情報のもとで成立した」評価があるだけで、「正しい」ないし「真の」価値評価はないと主張するなど、興味深いところを持つ（鷲田 1999：61）。ただ、上述のところから選好と時代や社会の構造との関連には踏み込まず、むしろ手続き的な正当性の確保にのみ関心を向けることには物足りなさを感じ

させる。

- 5 スミスの同感 (sympathy) 論の「社会化する個人」を想定する方法論的個人主義としての解読とその現代的意義については、松嶋（2019：24,46-47）を参照。
- 6 この議論は、規範や価値を公共的論議の対象とするというサゴフの主張は無理という文脈で現れているのであるが、ピーコックはさらに、市場での経済的行為も当事者たちの相互了解を可能ならしめている規範的枠組みの内部で、その枠組みに支えられてはじめて成り立っているという、本稿後論の価値尺度論からみてきわめて興味深い見解を引き出している（拙稿 2003：21）。
- 7 人々の価値観が社会的・経済的環境に制約されることは、人々が必ず自らの利得を守るべく行動することを意味しない。むしろ、恵まれていることを負担に感じ、利害対立する側の人々に共感を抱くこともある。とはいえ、設例にもあった湿地の価値をめぐる植物学者と鳥類学者の対話のような事例であれば自らの価値観を封印して相手の主張に耳を傾けることも生じやすからうが、社会的・経済的構造に関わる対立であれば、公共的論議のなかで諸価値それぞれの背後に踏み込み「熟慮」するのは容易ではなからう。この点、フォスターは、人々の共感を呼ぶ優れた芸術的創作活動を念頭に、公平無私で (disinterestedness)、かつ軽薄さを避けるべく人々の生活の現実を暖かい眼差しで注視し (attention)、しかも他者に流されることなく (authenticity) 取り組むことこそ、必要な条件であると主張し、そうした資質を培う教育の重要性を強調している（拙稿 2003：22-24）。
- 8 たとえば、原田（1989）、同（1992）を参照。
- 9 チッソ株式会社への社名変更は1965年で、水俣病が顕在化した当時は新日本窒素肥料株式会社であったが、本稿では統一的にチッソと表記する。
- 10 付言すれば、水俣市による水俣病隠しの対応には、有機水銀の排出につながったアセトアルデヒド酢酸工程を開発したのが当時の市長であり、しかも彼は興南工場から引き揚げてきたエリートとの軋轢のなかで退社した人で、チッソにではなくチッソ労働者に支持されていたという複雑な背景も絡んでいた（後藤 1995：39-49）。
- 11 「」を付しているのは、それがいわばカッコつきの豊かさであることに留意したいからである。
- 12 自主交渉派のリーダーであった川本輝夫氏も同じ想いであったことについては、後藤（1995：第3章、第4章）を参照。
- 13 なお、開沼氏は、中心部に位置する人々をこの関係に無自覚にさせるメディエーターの存在にも強い関心を寄せている。

- 14 開沼氏が「立地地域とその住民」を指す「ムラ」に視座を定めた理由については、(開沼 2011: 49-51, 71-75など)を参照。
- 15 日本社会全体に引きつけられ、1960年代にテレビ放映されたアメリカのホームドラマを通じて日本人が家電製品に囲まれた豊かな生活にあこがれたことが想起されてもよいであろう。
- 16 原発誘致に伴う電源三法交付金の年次的推移や使途拡大については、大島(2011: 106-110)をも参照。
- 17 本文で触れた諸潮流のほか、たとえば発展途上国における開発と環境の共生のあり方に関わる諸研究や環境問題の社会史研究などがただちに想起されよう。
- 18 但し、ボードリヤールがもっぱら消費に焦点を当て、消費のあり方と対を成す労働世界のあり方を軽んじるのは一面的であろう(拙稿 2006: 124以下)。
- 19 たとえば、湯浅(1993: 43)など参照。
- 20 マルクス自身について言えば、晩年のマルクスが「人間と自然の物質代謝における緊張関係」に注目して研究を進めていたことについての齋藤幸平氏の考察(齋藤 2016)は興味深い、緊張関係は物質代謝を意識的に制御することで乗り越えられるとみている点に限界も覗く。筆者としては、中期マルクスが垣間見せた「自然と人間との非和解性」論にむしろ関心を寄せたい。

参考文献

朝日新聞西部本社編

- 2013 『原田正純の遺言』岩波書店
- 石田雄 1995 「水俣における抑圧と差別の構造」色川大吉編著『新編 水俣の啓示』筑摩書房、所収
- 石牟礼道子2004 『苦海浄土』講談社文庫
- イリイチ, I. 1982 玉野井芳郎他訳『シャドウ・ワーク』岩波現代選書
- 2015 渡辺京二他訳『コンヴィヴィアリティのための道具』ちくま学芸文庫
- 梅澤直樹 1991 『価値論のポテンシャル』昭和堂
- 1997 「エコロジー・ジェンダー・経済学」『彦根論叢』(滋賀大学) 309号
- 2002 「女性労働問題差別とマルクス派社会経済学の再構築」久場嬉子編『経済学とジェンダー』明石書店、所収
- 2003 『『自然の価値評価』が問いかけるもの』『経済経営研究』(福井県立大) 12号
- 2006 『『豊かな』社会の社会経済学的解析

- に向けて』『彦根論叢』356号
- 大島堅一 2011 『原発のコスト』岩波新書
- 大森正之 2004 「ピグーにおける環境問題の事例・原因・処方箋」『政経論叢』(明治大学政治経済研究所) 72巻6号
- 緒方正人 2001 『チッソは私であった』葦書房
- 開沼博 2011 『「フクシマ」論 原子力ムラはなぜ生まれたのか』青土社
- 嘉田由紀子1995 『生活世界の環境学』農文協
- 川北稔 2010 『イギリス近代史講義』講談社現代新書
- 後藤孝典 1995 『沈黙と爆発』集英社
- 斎藤幸平 2016 『「フラスコ」と『物質代謝論』の新地平』岩佐茂他編『マルクスとエコロジー』堀之内出版、所収
- 篠原一 2004 『市民の政治学』岩波新書
- 高木仁三郎1985 『いま自然をどうみるか』白水社
- 玉野井芳郎1990a 『著作集② 生命系の経済に向けて』学陽書房
- 1990b 『著作集④ 等身大の生活世界』同上
- 原田正純 1989 『水俣が写す世界』日本評論社
- 1992 『水俣の視図』立風書房
- 平田剛士 1997 「制動装置なきシステムが『無目的ダムを作る』週刊金曜日編集部『環境を破壊する公共工事』緑風出版
- 堀江邦夫 1979 『原発ジプシー』現代書館
- ボードリヤール, J. 2015 今村仁司他訳『消費社会の神話と構造 新装版』紀伊國屋書店
- ポランニー, K. 2009 野口建彦他訳『新訳 大転換』東洋経済新報社
- 2012 若森みどり他編訳『市場社会と人間の自由』大月書店
- 松嶋敦茂 2019 「現代経済学のあり方を求めて」松嶋他編『現代経済学史の射程』ミネルヴァ書房、所収
- 水俣フォーラム編 2018 『水俣から』岩波書店
- 宮本憲一 1976 『社会資本論 改訂版』有斐閣ブックス
- 2007 『環境経済学 新版』岩波書店
- 湯浅赳男 1993 『環境と文明』新評論
- 若森みどり2001 「「市場対計画」の終焉と『大転換』」杉浦克己他編著『多元的経済社会の構想』日本評論社、所収
- 2011 『カール・ポランニー』NTT出版
- 鷲田豊明 1999 『環境評価入門』勁草書房